

平成21年 2月 3日

## 草の根技術協力事業 モニタリングシート

※電子データも提出してください。

1. 対象国名・事業名	スリランカ コットマレー地域の小農民によるアラビカコーヒー栽培のコミュニティ開発	
2. 事業実施団体名	特定非営利活動法人日本フェアトレード委員会	
3. 事業実施期間	平成 19 年 9 月 1 日から平成 22 年 3 月 31 日	
プロジェクト目標	コーヒー豆の選別と乾燥・調整に必要な資機材が整い、アラビカ種の生産環境と体制が整う。	
<b>成果1</b> <b>活動1-1</b> 乾燥工場を利用したコー ヒー豆の収穫と乾燥          <b>活動1-2</b> 村人の共同作業	<b>活動実績</b> コーヒー豆は 12 月にラヴァナゴダ村で出荷の準備が始まった。 JICA 草の根支援で建設された乾燥調整工場の稼働がついに始ま った。最大の懸案事項の豆の乾燥が行われた。 豆の収穫は 2400kg 程のコーヒーチェリーが村人により収穫され た。豆はほぼ完熟豆に近い。 工場では、コーヒー生豆の出荷に向けての天日乾しや乾燥作 業が始まった。 最終的に 400kg のコーヒーを何とか、出荷できるところにたどり 着いた。チェリーから脱穀し、生豆になるには、ほぼ 6 分の 1 位に なることが分かった。  今回の収穫で注目されることは、ラヴァナゴダの村人がチェリー を洗う作業や生豆の選別作業を行ったが、幼稚園に子どもを連れ てきたときに、共同でチェリーを水で洗う作業を行う。また、良い豆 と欠点豆をより分ける作業であるが、村の女性たちがシンハラ語を おしゃべりをしながら、楽しそうに仕事をしていた。そのような風景 が見えた。コーヒーの収穫によって、村人のコミュニティの形成の 芽が生まれつつあることが見えた。	<b>特記事項(計画通りにいかなかった理由・問題          点・注目点)</b> 乾燥工場の稼働技術と方法、手順が未熟 デヘミ組合の組合長はじめ、全く初めて機械を使うこと になり、まだ勉強が足りないので、手探り状態だった。 乾燥の到達点が分からないので、何度も乾燥機械を 回すことになった。 電気の停電とか、電気供給元との問題、電気のアン ペアが足りないなど、電機系の問題が多くあった。 乾燥後の出荷袋の問題があった。麻袋の調達の問題。 豆の収穫はほぼ完熟豆だが、まだ青い豆が混じる。 そこで収穫時期を遅らさなければならぬ。最初なの で、いろいろ問題点は多いので、これから全般にわた って注意していくことが大切だ。 ただ豆の味は今度日本に輸出を行い、焙煎し、飲んで みて味を確かめる。 農家のコーヒー豆収穫から、工場にコーヒーチェリー を持ち込み、水洗い、脱穀、乾燥、選別など作業手順 の問題。

PDM (なければ案件概要票) からプロジェクト目標、成果、活動を転記する。

<p><b>活動1-3</b>  セミナー開催  活動 1-3-1  ラヴァナゴダ工場での模擬実  習稼働</p>	<p>1. 目的及び内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コットマレーラヴァナゴダ村のコーヒー工場の円滑、かつ安全な稼働の認識を高めることを目的。</li> <li>・コットマレーラヴァナゴダ村の組合長はじめ、デヘミ組合人たちに、コーヒー工場のそれぞれの機械の役割、機能、取扱い方法など、最も基礎的な教育を行う。</li> <li>・稼働、運転の実施模擬訓練を行った。</li> </ul> <p>2. 実施日時 2008年8月8日</p> <p>3. 参加者  農業輸出局職員 4 名、デヘミ組合員数名、実施団体メンバー8名</p> <p>4. 活動内容及び成果  スリランカで初めての乾燥工場を完成したが、デヘミ組合の人たちによる、機械操作や工場の目的であるコーヒー豆の乾燥度合の見計らいなどの技術習得活動を行った。専門家の手から男性青年組合長が、積極的に学び組合自らが乾燥工場の運転ができるようになった。</p>	<p>さらに工場自体の管理運営問題など、問題点と課題はたくさん見えてきた。しかし、村人のやる気はたくさんあるので、これから順番に教えてコーヒー工場運営がスムーズに行くようにしたい。</p>
<p>活動 1-3-2  「スリランカにおけるコーヒー  ビジネスの将来」</p>	<p>1. 目的及び内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カウンターパートナーの農業輸出局が、デヘミ組合へのコーヒー指導をして輸出できる豆について認識を高めることが目的。</li> <li>・10月、11月にラヴァナゴダ村のコーヒー収穫が始まることで、コーヒー工場の稼働は本番を迎えた。農業輸出局とコーヒー機械を設置した業者への基本的な教育</li> <li>・日本でのコーヒー輸入のチェックの厳しさなど認識させ、コーヒービジネス可能性のセミナー</li> <li>・これからのスリランカのコーヒービジネスの検討活動を行った。</li> </ul> <p>2. 実施日時 2008年10月26日</p> <p>3. 参加者  農業輸出局職員 2 名、ペラデニア大学農業経済専門家 1 名、農業コーヒー豆研究者 3 名、コーヒー専門家 1 名、実施団体 3 名</p>	

#### 四半期振り返りコメント(団体)

ラヴァナゴダのコーヒー豆の収穫と乾燥が始まり、約 400kg の乾燥生豆ができた。

現在日本に送る準備をしている。この中で、コーヒー乾燥作業は、村での収穫、水洗い、脱穀、乾燥、パーチメント脱穀などの作業を手際よくこなすということや、電気供給の問題などいろいろあったが、想像以上にうまくできたように思う。農業輸出局のメンバーとデヘミ組合が頑張っていて、初めてのわりにはきれいなコーヒー豆に仕上がっている。

コーヒーの味もアラビカ種の本来の味が生まれている。スリランカでのコーヒーは土臭くて、おいしいという人は少なかったが、サンプル調査でも美味しいという評価を受けた。以前のスリランカコーヒーを知っている人にとっては驚くような味の変化である。課題は多くあるが、問題を解決しながらさらに進めていきたい。

最後に評価したいことは

- 乾燥工場は幼稚園の近くにある。そこに子どもを預けて、女性がその工場で、収穫した豆を洗う作業を共同で行うようになった。
- 豆の出荷のとき、悪い豆、欠点豆を選別する作業があるが、女性がその仕事を共同で行っていた。(写真参照)

日本までの輸出には、もちろん良質の豆だが、豆のサイズ分け、どのようなパッケージが必要か、麻袋で行うようにすることや、1袋単位を何kgに設定するか、その袋への印字表現、とか課題はこれから多く残る。

#### 在外コメント

#### 国内機関コメント

本四半期では、初のコーヒー豆収穫と乾燥の共同作業が行われた。円滑な乾燥工場運営実現にはしばらく時間を要するが、本案件終了までの残り1年で、村民が主体となった工場運営の実施を期待したい。

また、女性達が共同の場を楽しみながらコーヒー豆選別作業を行ったとの報告もあり、男性に限らず女性を含め村全体で積極的に本事業に取り組んでいる様子が伺える。

また実施団体の呼びかけにより、平成20年12月6日に、熊本市国際交流会館にて、日本フェアトレード委員会及びJICA九州が主催となった「スリランカフェスタ熊本」を実施し、25名程が集まった。内容は以下の通りである。

- スリランカの歌と伝統楽器演奏（在日スリランカ人と小学生より）
- JOCV活動報告（熊本在住JOCVOV {スリランカ・幼児教育} より）
- スリランカの幼稚園と子どもたちの現状（熊本県内幼稚園長より）
- 草の根事業実施に至る背景と今後の展望（在日スリランカ大使館公使、前スリランカ援助窓口機関日本担当局長より）
- 草の根技術協力事業概要説明（JICA九州市民参加協力調整員より）
- 草の根事業実施報告（日本フェアトレード委員会理事より）

・草の根事業にて栽培しているコーヒーの試飲（「飲み易く、おいしい」との感想が多数あり。）

本イベントには、草の根事業実施団体・JOCVOV・地元の国際交流組織 JICA 九州等多様な関係者が参画しており、連携事業の一例として提示できる。

- 添付資料： 1. ラヴァナゴダ村における生豆選別作業の様子（実施団体ホームページより）  
2. 日本フェアトレード委員会ニュース No.2（実施団体ホームページより）  
3. スリランカフェスタ熊本 2008 の様子（実施団体ホームページより）

村の女性の 400kg のコーヒー豆の選別作業風景



農業輸出局のバスナヤカさんとのミーティング

